

令和7年



(気象庁)



水稲病害虫の防除対策

令和6年は縞葉枯病や斑点米カメムシ類の発生がやや多く確認されました。令和7年はヒメトビウンカの発生量は平年並と予想されていますが、前年に縞葉枯病が多発した地域では、高い保毒虫率と推測されます。さらに、夏季は高温傾向であると予報されており、紋枯病の発生にも注意が必要です（北海道病害虫防除所病害虫発生予察情報・長期予報より）。併せて、その他主要病害虫の発生動向にも注意しましょう。

紋枯病と疑似紋枯症（赤色菌核病ほか）の発生に注意

紋枯病は、茎（稈）を弱らせ倒伏を助長するため、収量や品質に影響を及ぼします。また、紋枯病によく似た病斑をつくる疑似紋枯症（赤色菌核病ほか）も見られます。茎（稈）にできた菌核がほ場に残って翌年の発生源になるため、前年度の発生を踏まえた防除判断が重要です。

紋枯病

高温性の病害で、茎（稈）を枯らして弱めます（写真1の①）。茎（稈）にできた菌核（写真1の②）がほ場に残り、翌年の発生源になります。



写真1 紋枯病の病徴と菌核（中央農試 野津原図）

疑似紋枯症の赤色菌核病

赤色菌核病は紋枯病と類似する病斑です。重症株は茎（稈）を枯らして稲体を弱めます。病斑上には黒い菌核は形成されず、収穫時期になると葉鞘の内側にオレンジ色の菌核（写真2の③、④）が形成されます。

写真2 葉鞘に形成されたオレンジ色の菌核（赤色菌核病）
（中央農試 野津原図）

紋枯病と疑似紋枯症（赤色菌核病ほか）の対策

“前年の成熟期”に
防除要否を判断
調査：10株×5ヶ所
（ほ場の縁～内部）
判定：成熟期の発病度40
（＝病斑高率35%※）
※ 止葉葉鞘まで紋枯症状が
散見される程度

当年度

次年度対応

防除対策の選択

A 紋枯病と赤色菌核病の両方が発生

水面施用剤（フラミピル粒剤、シモザール粒剤）を使用

B 紋枯病が単発

茎葉散布（無人ヘリ または 地上散布）

〔薬剤は アトサム・アツキストビツ水和剤F またはフルコ水和剤Fの効果が高い
散布時期は出穂20日前 と 出穂期の2回散布〕

上記の防除判定の水準にまで達していた場合は、育苗箱施用剤を使用する

* 使用薬剤が不明な場合は普及センターに相談して下さい

2025年6月

イネミギワバエ(イネヒメハモグリバエ)に注意



写真3 イネミギワバエの①卵、②食害被害の様子、③葉身を食害する幼虫

被害症状 害虫は稲の水面に接した浮き葉などに好んで産卵します。ふ化後の幼虫は葉身に食入して葉肉を食害し、葉が溶けたようになります。食害がひどいと枯死することもあります。

発生状況 道内の一部で被害が確認されていましたが、これまで発生がなかった水田においても発生経過に注意が必要です。

防除 発生が目立つ場合は、登録のある薬剤を選択しましょう。移植後の浮き葉が産卵対象となりますので、極端な深水や徒長苗に注意しましょう。また、多発時には茎葉散布を実施しましょう。

ヒメトビウンカに注意

被害症状 縞葉枯病のウイルスを媒介します。発病した稲は葉に縞状のかすり模様が現れます。早期に発病した稲は枯死したり穂が出すくみとなります。

発生状況 畦畔などの雑草地で越冬し、稲が移植されると水田に飛び込み増殖します。

防除 縞葉枯病の発生地域では育苗箱施用、水面施用、本田茎葉散布を組み合わせた総合的な防除を励行します。



写真4 縞葉枯病の発生症状

イネドロオイムシの防除要否判断



写真5 イネドロオイムシの①卵塊、②食葉被害の様子、③成虫

防除の要否 1卵塊/株以下の密度では減収となりません。防除の要否には「北の虫見番」を活用します。

薬剤感受性の低下

イネドロオイムシは、過去に有機リン系、カーバメイト系で薬剤抵抗性個体群が確認されています。近年ではイミダクロプリド剤及びフィプロニル剤に対する薬剤感受性低下の個体群が道内の一部で認められています。

効果的な防除と薬剤選択

抵抗性個体が確認された地域では、**作用性の異なる薬剤によるローテーション防除**を実施しましょう。その他の地域では、前年までの防除効果を再検討した上で、薬剤を選択しましょう。



「北の虫見番」
(北海道病害虫防除所)

イネキモグリバエ（イネカラバエ）に注意

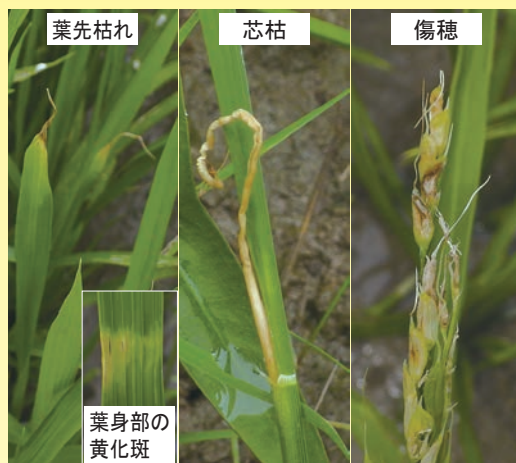


写真6 イネキモグリバエによる被害
(中央農試 下間 原図)

被害症状 本害虫は稲の葉裏や葉鞘に産卵し、ふ化後の幼虫が茎内に潜入します。幼虫は抽出前の葉や穂を食害し、被害をもたらします。

発生状況 これまで道南地方、後志地方の一部で被害が確認されていましたが、近年では道央の水田において本種による被害の発生が認められています。これまで発生のなかった水田においても発生経過について注意が必要です。

防 除 被害が目立つ場合は、次年度に登録のある薬剤を使用しましょう。また、畦畔のイネ科雑草（スズメノカタビラ、レッドトップ等）が幼虫の越冬場所となるので、根際から除去しましょう。

モニタリングを利用したカメムシ防除

- 「出穂期」と「出穂から7日後」は基幹防除です。基幹防除以降は、モニタリング調査（すくい取り・フェロモントラップ）により防除の要否を判断しましょう。
- 水面施用剤や残効の長い成分を含む剤を使用することで、防除回数の削減も可能です。

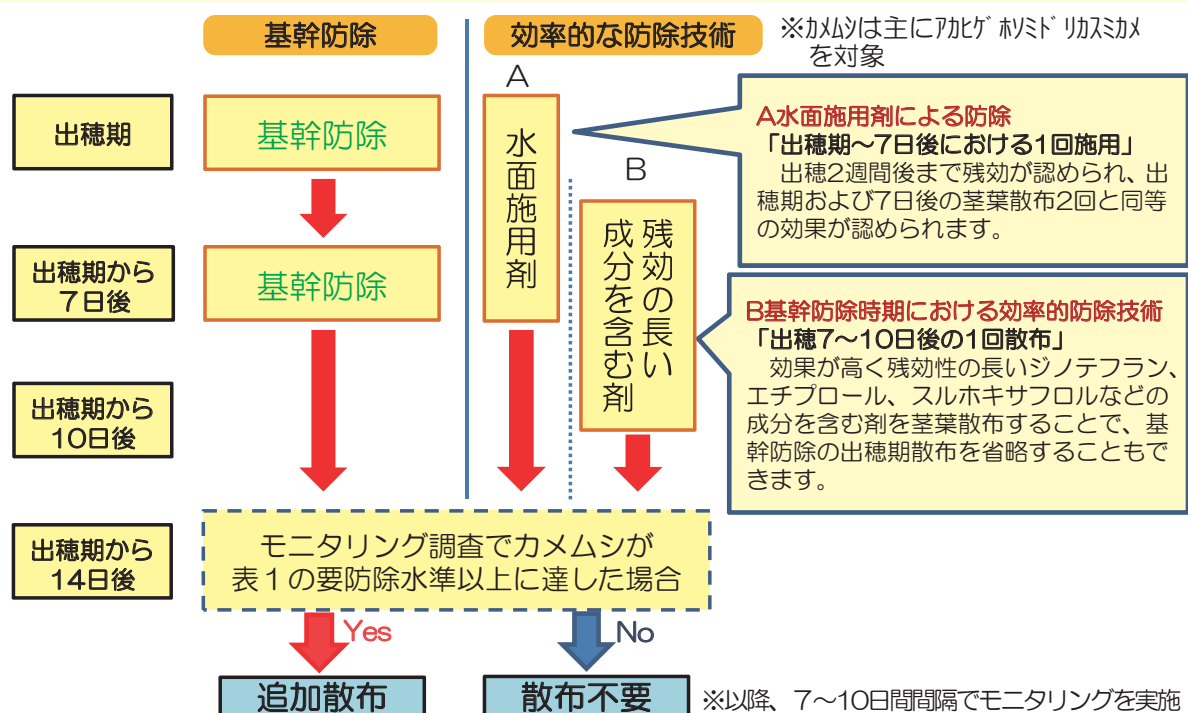


図1 モニタリングに基づくカメムシ（アカヒゲホソミドリカスミカメ）防除の要否判断

表1 割刈歩合ランクに対応した追加防除の要防除水準

（「R6年度北海道農作物病害虫・雑草防除ガイド」より）

割刈歩合 ランク ¹⁾	主な品種 ²⁾	要防除水準	
		20回振りすくい取り 捕獲虫数	フェロモントラップ 捕獲虫数
少	きたくりん、吟風	3頭	— ³⁾
やや少	ゆめぴりか*	2頭	—
中	きらら397	2頭	2.2頭/7日間
やや多	ななつばし*	1頭	—
多	ほしのゆめ	1頭	1.2頭/7日間

注1) R3年度に改定された新たな割刈歩合ランクを示す。注2) *は割刈ランクに基づいて当てはめた品種
注3) —はデータが無く要防除水準を設定できない。



写真7 フェロモントラップに誘殺されたカメムシ

ばか苗病菌の孢子飛散を防ぐ

- ばか苗病菌の孢子は遠くまで飛散するため、水稻の種子生産に甚大な影響を及ぼします。
- 採種ほ場だけではなく、周辺ほ場も含めてばか苗病の発生には注意が必要です。
- 種子を保管する納屋や育苗ハウス周辺に稲わら、籾殻が残らないよう清潔に保ちます。

本田での伝染と処理方法

- 本田での症状：発病個体は徒長・黄化し（写真8）、出穂期頃までに枯死して株元には無数の孢子を作ります（写真9）。
- 伝染：孢子は数百メートル飛散するとされ、出穂・開花期の籾に付着すると、その籾は汚染種子となります。



写真8 育苗中の発病個体



写真9 枯死株に作られた孢子

罹病株の処理方法：

- ☐ 出穂までに、枯死前の罹病株を株ごと抜き取りましょう
- ☐ 疑わしい徒長株・黄変株も抜き取りましょう
- ☐ 抜き取った株は、ほ場外に搬出し土中に埋める等、適切に処分しましょう

いもち病対策を万全に

感染源をほ場外へ搬出

- 処理方法：補植用の残り苗や代かき後にすくい上げた残さ物等はほ場外で適切に処分しましょう。

早期発見のポイント

- 水田内見歩き調査時期：BLASTAM（プラスタム）を活用して、効率的に調査しましょう。
- ☐ 感染好適日の約1週間後が調査適期
- ☐ 好適条件が連続する場合は要注意
- ☐ 葉いもちを発見したら直ちに茎葉散布
- 見歩き調査場所・方法：
 - ☐ いもち病が発生しやすい場所
 - ・前年の発生場所
 - ・葉色が濃緑色の場所
 - ・風通しの悪い場所
 - ☐ 10mを4か所程度、稲株をかき分け、下葉を重点的に観察しましょう



BLASTAM
(北海道病害虫防除所)

耐性菌の発生に注意

- 道内各地では、MBI-D系剤耐性菌が確認されています。
- Qol系剤は、西日本や東北地方の一部で耐性菌が確認されており、耐性菌発生リスクが高い系統です。北海道でのQol系剤に対する耐性菌は確認されていませんが、使用にあたって、①年1回の使用とする、②体系防除時は作用性の異なる薬剤と組み合わせる、③採種ほ及び周辺ほ場では使用を控える、④規定量の処理を行うことが重要です。

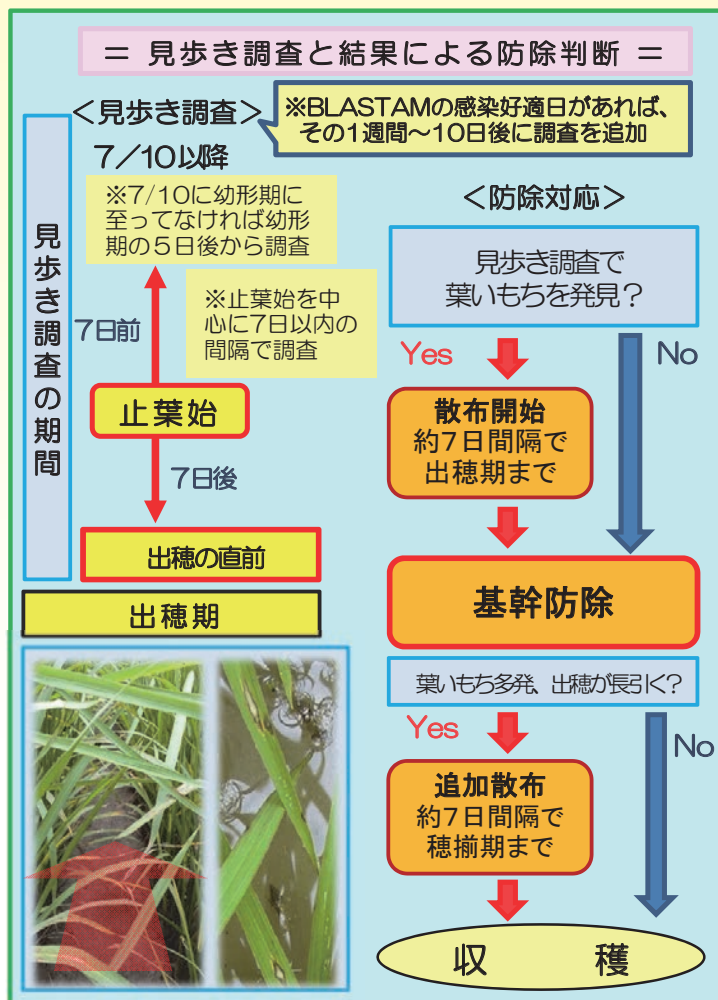


図2 いもち病の見歩き調査と防除対応